京鹿子

3月号

―近詠―

豊田都峰 心響集 その三

彩葉をばはさみなほして日記果つ

初夢は一本棒立てのひと幕

初比叡わが八十の座標軸

初雀かがやきを脱ぐふたみ振り

わが窓に御慶一声里鴉

雪嶺は源流にして川ひかる

PDF= 俳誌の salon

雪しづる昼の林の日を乱し

林中の雪のしづれのささ破れ

風花をふうみい数へに遅れがち

土橋より二三歩にして芹の水

大寒の白砂敷は神のもの

神坐の白砂に立つ寒明り

風花のひとさし舞ひの神なる坐

護王なるそは大寒の一柱

PDF= 俳誌の salon

—丸山佳子作品—

春霖雨

丸山佳子

げんげ絨毯夫と七世の香をわかつ

われ情にもろし春水堰あふれ

解く帯になほ春の日の野のぬくみ

春霖雨乳はつて來し犬も猫も

春霖雨魚さきし手をはゞかりぬ

PDF= 俳誌の salon

秀華採集

枯野原ここらあたりを住まひとす　　高木晶子

晩年めく人生の心象風設計図が。「枯野原」は風になびく多くのものがあってこそ、大きな過去を背負ってこその今である。大きな安住図と解釈したい。

冬夕焼メタセコイアに血が通ふ　　片山熙子

唐辛子いよいよ曲る日和かな　　津野洋子

前句の化石の樹は枯木の姿が美しいが、遠い時代のものゆえ「冬夕焼」がふさわしい。後句のある瞬間の把握、その「曲る」ところに美意識がある。

PDF= 俳誌の salon

―近詠―

梅見月

鈴鹿　仁

一途なる遠物見して冬の鷺

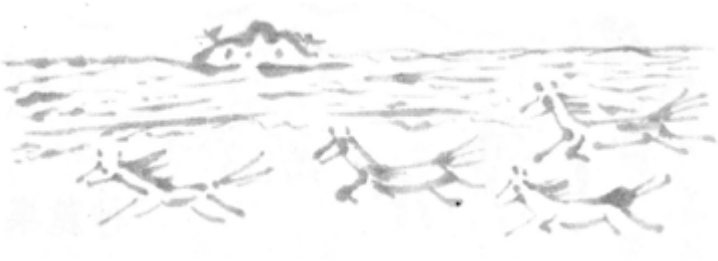
着ぶくれて御苑の広さ持て余す

御所九門生かされ生きる梅古木

里恋ひのからす一声寒明ける

福耳に浮世ばなしや梅見月

PDF= 俳誌の salon



―近詠―

暖鳥

和田　照海

雪の津軽０番線に乗り替へる

雪婆耕馬で老ゆる睫毛かな

金閣のほかは映さず戻り鴨

竜の玉かかへ地蔵の抱き艶

海の日をくがね返しに暖鳥

PDF= 俳誌の salon

神麓集

ポッダム少尉　藤岡紫水

天平の稜線ゆたかお山焼
ボールペンみな色かすれ年を越す
冬帽子ポッダム少尉まだ老いず
花枇杷や男世帯の味気なさ
山茶花や翳ればつのる水の音

右顧左眄　竹貫示虹

蜷の道行きつくまでの右顧左眄
花消しの雪ドにびつくり子鹿の瞳
平成を昭和で数へ春の山
追憶のごとしんしんと春の雪
春灯には人住むならひひとり旅

松田都青

小さき児の小さき望みや焚火燃ゆ
浅漬や過去はひつそり桶の底
賣文てふ言葉ちらつく漱石忌
どの家も蕪の白きユトリロ展
義理かかぬ程の付き合ひ秋の酒

北川孝子

ひそかなる言問ひ胸に冬木立
窓に寄る自愛ごもりの十二月
冬木道水かげろふの流れかな
桜紅葉打たれ強くて泣き虫で
冬星座亡き人に問ひ吾に問ふ

新藁　丸井巴水

鉋屑火付け鎮守の焚火とす
木で熟す柿の真下へ伸びる道
貸家札ひと角はがれ枇杷の花
新藁を軍鶏の毛焼きの火に加へ
拍子木の音を打ち込む町師走

お正月　塩貝朱千

八咫がらす畏れ遠啼き初鴉
騒々し雀のお宿もお正月
句座をまづ朱の太書きに初暦
めでたさは六兵衛さんのすぐき樽
寒梅や湖を透かして陽のいろに

PDF= 俳誌の salon

京鹿子集

豊田都峰選

枯野原ここらあたりを住まひとす
報恩講支へに支へ太柱
銀杏散る南無阿弥陀仏の間隔で
テーブルを汚しては拭く雪もよひ
冬夕焼メタセコイアに血が通ふ
鴨見てる青年ふいに指鳴らす
気がかりは冬菜の畝の曲りぐせ
手に熱き雑巾しぼる十二月
唐辛子いよいよ曲る日和かな
晴れて散る桜紅葉や竜馬像

京都　高木　晶子

手力男少しつまずく里神楽
神官が床几を運ぶ鵙日和
初冬の夜テレビに映る古都ドラマ
冬ざるる英話は未だ儘ならず
古日記余白は胸に母の顔
遠く近く枯木の梢ペン画にし
赤き屋根多き山皿冬日和
影長く畑巡る人冬日和
茶の花の垣根めぐらし庄屋跡
老犬の歩み止めたるお茶の花

オハイオ　水谷　直子

片山　熙子

津野　洋子

札幌　野村　鞆枝

PDF= 俳誌の salon

白息の声高くして今着けり　酒田　藤波　松山
落もみぢ踏めば昔の音のせり
初霰身の引しまる夜の窓
銀行の跡や落葉の吹溜り
早や師走何も手つかず日のすぎて　渋川　東　秋茄子
クリスマス孫に何かとシヨツピング
菊を焚く狭き庭では香を残す
枯菊の一輪の赤いとほしく
トンネルを出れば京都の山紅葉　さいたま　神田　惣介
湖蒼く山は紅葉水脈白し
裏通り馬蹄の響き月の影
寒の人異人僧侶の拭掃除
小嶋来る金箔の御座はがらんどう　千葉　伊藤　希眸
殿中でござる障子の白顕たせ
どんぐり踏む子ども還りの城の道
黄葉の風梳く音をたて天守閣
ストローで吸へない程の秋がこぼれた　直江　裕子
冬瓜のまつ白な嘘煮てしまふ
小春日の夫とガラスがやはらかい
胡桃と耳どこか似てゐる部屋がある
未練とは美しきもの冬の薔薇　佐々木紗知
十二月かりかり揚がるパンの耳

冬ざれの野に光りたる目玉かな
柚子湯にて雑念ひとつづつ捨てる
夜半の雨銀杏落葉の嵩を踏み　高野　春子
柚子湯かな少し弛める力瘤
枯菊焚く庭にちひさき祠かな
蓋の無き湯呑がひとつ十二g月
家移りに一年はやし秋惜しむ　布川　孝子
エレベーター待つ高層のそぞろ寒
蜂蜜の塊ほぐす小春かな
行く秋の栞横目に美顔術
母の味数かず増ゆる菊膾　松戸　岡山　敦子
色鳥の狭庭を占めり声占めり
木の葉雨独りぼつちになる予感
小春日や城は遥かに飯盛山
自分史に一筆くはふ葛まつ赤　翌志野　上野　紫泉
風鐸鳴る銀杏黄葉のひかりけり
色葉散るひつそり苔を褥とす
柿撓む鏡湖にうつす鐘の音
落葉ふみ妻のあとさきかはす影　船橋　元橋　孝之
忘れ得ぬ杜のひとこと神の留守
冬日利旅のつかれの寝息はや
一片の樹皮持ち歩く冬木立

PDF= 俳誌の salon